

CASE 11
4、5歳児

カブトムシの飼育

協力園
幼保連携型認定こども園
ひめやま幼稚園

(幼児の実態)
春、今年も地域の方が、衣装ケース3個にカブトムシの幼虫を入れて持って来てくれました。この地域の方も、この園の卒園生で、幼い時に昆虫と遊ぶ楽しい経験をしているようです。今の子どもたちにも、自分と同じように楽しい体験をさせてほしいと、毎年、春になると沢山のカブトムシの幼虫を届けてくれます。
7月、幼虫から成虫に育ったカブトムシをケースから飼育ケースに移し、幼児が自由に触れることができるようにしました。



「これ、カブトムシの木で。(餌は)ここ。」4歳児



「たたかわせよう。」4歳児



カブトムシを大事にする気持ちの表現方法 5歳児



7月第1週、登園した子どもが、カブトムシの飼育ケースの前に集まってきます。(カブトムシの飼育ケースは大きいものが2つ)。成虫になって遊べるようになったので、子どもたちには大人気です。
4歳児が大きな飼育ケースを囲んで、カブトムシと遊んでいます。やっとカブトムシを持てるようになった子どもは、得意げに「ほら。」と、角を持って友達に見せていました。通りかかった保育者は、持ち方を教えるとスツとその場を離れます。
また、カブトムシの世話の得意な子どもは、飼育ケースを囲んでいる友達に「これ、カブトムシの木で。これは、ここ。」と、空っぽのゼリーカップを出し、餌のゼリーと入れ替えます。周りの子どもたちは、その子の様子をじっと見えています。
少し時間が経つと、また違う子どもたちが飼育ケースを囲んでいます。カブトムシを持っている子どもは、かなり遊び慣れている様子で2匹を持って戦わせています。
5歳児もずっと遊び続ける4歳児に「触りすぎや。カブトムシは首があつて、触りすぎたら取れるんで。」と、年下の友達に分かりやすく言葉で教える姿もありました。

8月になって、毎日カブトムシと遊んでいましたが、5歳児が動かなくなったカブトムシを発見しました。遊んでいたカブトムシを飼育ケースに戻し、「カブトムシは、高い木に登りたいんじゃないのかな。」と、保育者に伝えました。それを聞いた保育者は、弱っていくカブトムシが元気になるようにしたいと願う子どもの気持ちを感じ取り、子どもたちと『カブトムシ』を作ることにしました。
保育者は「何処に作ることにする?」と、子どもたちに問いかけます。「カブトムシは、高い木に登りたいと思う。」「みんなが見える所がいい。」という子どもの思いを大事にし、園庭中央にあるクヌギの木を取り囲んで柵を作ることになりました。

9月、『カブトムシ』が出来上がり、飼育ケースからお引越すです。保育者は子どもたちの言葉から、高い枝に餌を置くこととしましたが、子どもたちは、カブトムシの餌場を自分たちの手の届く、少し低い枝にしようと言いました。自分たちで世話をしようと考えていたからです。保育者は、みんなで世話をすることに決めておきたいことがあるか、子どもたちと話し合いました。「みんなが入ったら、幼虫を踏んでしまうかもしれない。」「踏まないでって教えないと。」という子どもの言葉から、『カブトムシ』に入った時のルールを、みんなに知らせる必要があることに気付きました。その方法として、文字で書くことを選びました。みんなで話し合いをして、決めたことを保育者に書いてもらおうと、「年下の友達も分かるように、絵を書いた方がいい。」と、言う子どももいました。また、カブトムシとクワガタを戦わせた時の様子を絵に描く子どももいました。保育者は、子どもたちの気持ちを汲んで『カブトムシ』の柵に貼ることにしました。

子どもたちは、カブトムシと遊び、死や命に向き合うことも体験します。四季を繰り返し、卵→幼虫→成虫となることを理解し、生き物の命を繋ごうとしています。この営みがカブトムシに親しみを感じ、接し方を考え、大事にしようとする気持ちを育んでいると考えます。

幼児期の終わりまでに育ってほしい姿「10の姿」

- 自立心
- 豊かな感性と表現
- 数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚
- 自然との関わり・生命尊重
- 社会生活との関わり

自然に触れて感動する体験を通して、自然の変化などを感じ取り、好奇心や探究心をもって考え言葉などで表現しながら、身近な事象への関心が高まるとともに、自然への愛情や畏敬の念をもつようになる。また、身近な動植物に心を動かされる中で、生命の不思議さや尊さに気づき、身近な動植物への接し方を考え、生命あるものとしてのいたわり、大切にすることを覚えるようになる。

事例から見られる10の育ち
自然との関わり・生命尊重
4歳児に分かりやすく教えた4歳児も、昨年度、カブトムシと触れ合う中で、死んでしまうということを経験したと思われる。カブトムシと十分に触れ合い、関わるのが楽しくなると、親しみを感じ、命あるものをいたわり大切にしようという気持ちが芽生えているのではないか。
十分遊ぶことで、カブトムシが好きになり、昆虫の体の造りや足の細部まで観察して気付いたり、もっとよく知ろうとしたりし、豊かな表現にも繋がっていった。

事例から見られる10の育ち
数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚
カブトムシは高い所が好きだが、自分たちがお世話するには、どの高さが良いのか、丁度良い高さを考えて餌場の設置をしている。
また、今までの経験から、自分たちの考えたきまりを相手に伝えるためには、文字で書く方法が良いと考えた。年下の友達には、文字だけで表記するだけでは分からないと考え、絵を添えるなどの工夫が見られる。

自然との関わり・生命尊重 環境構成のポイント

- 実際に触ったり、遊んだり、世話をしたりして、生き物に十分触れさせる環境。
- 十分に触れて遊ばせながら、生き物の接し方に気付けるような声かけ。
- 生き物が生活しやすい環境にしてあげようとする子どもの思いや考えを、みんなの話題として考え合う場作り。
- 生き物の死を理解できるような話し合いの場。